

評説 牧野信一

藥師寺

明治書院

評說  
牧野信一

藥師寺章明

# 評説 牧野信一

定価 二、八〇〇円

昭和四一年二月二〇日 印刷  
昭和四一年二月二五日 発行

著者◎藥師寺章明やくしじのりあき

發行者 文入宗義

印刷者 岡崎正夫

發行所 株式會社 明治書院

東京都千代田区神田錦町一の二六  
電話 東京(二九四)五三三六(代)  
振替口座 東京四九九一番  
印刷 太陽印刷工業株式會社  
製本 橋本製本所

## 序 文

私をはじめて薬師寺君に接したのは、終戦直後で、日本大学の講師をしていた時であり、君は多分文学部三年の学生だった。

この当時の君たちのクラスにはふしぎに個性の強い人が多かった。軍部がなくなって士官学校出身の若い将校諸君が方向を転換して入って来たということもある。かなり年輩の人も多く、ある女子学生などは三十代の半ばに達していたかと思う。そういう中にあっても薬師寺君はもっとも異色のある存在だった。

何しろ大きな目玉をギョロギョロさせていて、しじゅう黙りこくって、そして、身体をいつもぶるぶる慄わしている。あれは別にアル中ではなく、くせなのだろうが、何となく周囲の人がそばにやるのを遠慮するようなところがあつた。私は昭和九年以降かなり多くの学生に接して今日に至っているが、学生時代の薬師寺君ほど、薄気味のわるい怪物のような印象を、ほかでうけたことはない。

そのうち同君が作家志望だということを聞くとともにしに聞いて、なるほどと思い、どういう作品

を書くのかと、ひそかに興味をもってながめていた。

先般君は創作集を上梓し、作家としてのスタートを切ったと見えたが、やがて『文学者』に、きわめて詳細な「牧野信一伝」がのりはじめた。

正直にいつて私は自分の眼を疑った。君にはエスプリに富んだ評論を、あるいは期待できるかも知れないが、丹念な調査と考証にもとづかねばならぬ着実な伝記研究は、とうてい無理だときめていたからである。学生時代にはノートなどをとることはもちろん、教科書すらもっていたかどうか疑わしかった人だからである。

だから牧野信一その人の事跡はもとより、その周辺について、こんりんざい洗いつくそうとする文章が、いつ終わるかわからぬほどにえんえんと毎月の雑誌を飾るのを見て、じつは私は自分の不明をひそかに恥じたのであった。

考えて見ると、牧野信一という特異な作家は、なるほど薬師寺君にふさわしい対象である。そしてほれこんだとなると、とことんまでつきつめようというのも、作家精神のあらわれかも知れないともかく、多少無軌道で、ルーズだと考えていた君に、この情熱的な執着があり、強烈な精神力があることを知って、私は改めて君を尊敬する気もちを生じた。

私の考えによれば、しんの伝記文学は芸術的な仕事である。平凡な学者は、いくら調査をつみかさねても、かんじんの人間をつかむことができない。反対に芸術家的な素質ならば、考証と実証の

塵にうずもれたかに見える叙述を通して、動かない人間像を建立することができる。

薬師寺君の「牧野信一伝」は、この後者であることを信じて疑わない。そしてまたこれ以上に緻密精細な牧野信一研究は、今後也容易に出ることはあるまい。

日本の近代作家研究は、まだ動かないすぐれた業績を、多く産んでいない。ことに昭和作家においては、一、二を数えるにすぎない。この時期にあたって、この本格的な研究書を得たことは、まことによろこびに堪えないのである。

昭和四十一年九月一日

吉 田 精 一

# 目次

## 序文

吉田精一

出発までのノート……………五

死の周辺をめぐって……………三

I 死と生活……………三  
——縊死をめぐる推論

II 死とその報道……………四

III 死をめぐると同時代作家の反応……………五

宇野浩二・石川淳・河上徹太郎・坂口安吾・浅原六朗・尾崎士郎・

榊山潤・久保田万太郎ら

伝記的事項……………九

I 家系と出生……………九

II 幼年時代……………一〇

——祖父母および父と母と子——

|               |    |
|---------------|----|
| III 少年時代…………… | 三九 |
|---------------|----|

——祖父母および父と母と子 (一)

|                      |    |
|----------------------|----|
| IV 神奈川県立第二中学校時代…………… | 一五 |
|----------------------|----|

学校生活と教科成績……………

家庭環境と交遊関係……………

|                |    |
|----------------|----|
| V 早稲田大学時代…………… | 一八 |
|----------------|----|

入学と落第……………

——母方の祖母だいをめぐって

文学開眼への道……………

|                   |    |
|-------------------|----|
| VI 作家牧野の人と生活…………… | 三四 |
|-------------------|----|

就職・帰郷・結婚・小田原の三年間……………

雑誌『随筆』編集者時代……………

上野桜木町・阿佐ヶ谷在住時代……………

再度帰郷・小田原在住時代……………

(一) 「田園叙事詩風ギリシャ牧野」の発芽……………

(二) 帰郷中の生活と読書・教養・作品……………

雑誌『文科』主宰前後（昭和五、六、七年前半）…………… 三四九

(一) 昭和五年再度上京の周辺……………



|                  |   |
|------------------|---|
| (一) 雑誌『作品』創刊を中心に | — |
| (二) 雑誌『文科』をめぐる人々 | — |
| 精神の衰弱と実生活の破綻     | — |

——挫折への誘惑

|      |    |
|------|----|
| 年譜   | 四三 |
| あとがき | 四二 |

評說 牧野信一



## 序にかえて

あるひとりの作家について、それを問題にしようとする事情は、いったいどういふことか。あるいは、精神の内部の止むにやまれぬ共感や要請にもとづいてであるとか、彼の（または彼女の）劇的生涯の幕切れに強い感銘を覚えたからであるとか、多かれ少なかれ、人がひとりの作家に向きあうたびに、右のような問が自らに課され、その必然の糸をたぐりよせ、その道すじを明らかにするための出発の足がかりが準備され、おそらく答は評家の数だけ用意されたと考えられる。

しかし、たとえば次のような有名なことばがある。「歴史」の意味を明かすには△ささやかな遺品と、深い悲しみとさへあれば、死児の顔を描くに事を欠かぬあの母親の技術より他にない▽と。また△歴史と作者の交渉する場所は、作者における「自然を尊重する念」を離れてはどこにも成り立ち得ない▽と。もちろん、ここでいわれている△自然▽とは、△随時に発見採集されるところの部分的な史料▽の謂であり、△自然を尊重する▽とは、史料を虚心丹念に尊重したために、かえって史料のなかに埋没し、光のように速い人間精神の運動を見失わぬ用心のためであり、自然を尊重しないと同じ結果にならないためである。

この一見平凡な常識は、その見かけの平凡さにもかかわらず、歴史叙述の困難と、それに対処する作者の態度の深刻さをうかがわせるに充分であるが、ここでは「歴史」一般にかかわることは措き、文学の過去に徴して、そこに生きた一作家の全容を問う場合の心がけと解してさしつかえあるまい。いずれにしろ、答は、でき上がったものを拝見せぬうちは見当がつかぬという仕掛けなら、如上のような問を最初に書きつけることの性急のそしりはまぬかれまい。精神の運動が神速な光であるなら、文学は、しょせん、その軌跡を宿した影にすぎまい。設問の意義は、利いた

ふうな生意氣をいうまえに、せいぜい、影のみを見て光を忘れるな、という態の、世間普通の健康な教訓を生かす努力に尽きるというものであろう。

## 出発までのノート

### 1

#### 出発までのノート

たしかに牧野信一という作家の名は、一部の文学愛好家以外、あまり普及していない、という意味で「minor writers のひとり」である。もっとも、大正一三年（一九二四）八月ごろから牧野死後にいたるまで、彼の人及び作品に深い愛情と理解を示し、数々の解説や全集（昭和一二、第一書房刊）の出版に尽力した宇野浩二氏は八二十四歳の秋（大正八・一二、『十三人』、処女作（『爪』）を発表してから、死ぬ年の二月ごろまで、小説を書きつづけた牧野は、十五六年ほどの作家生活をしたわけであるから、生命があまり長くなかつたわりに、作家生活は長いほうであつた。つまり、かりに、しぜんな死にかたをしても、四十一歳でこの世を去つた作家が、十五六年の作家生活をつづけて、八十余篇の作品を残すといふのは、まづ、めづらしい事である（『創元選書『牧野信一集』』と述べている。引用文中八十余篇の作品√とあるのは、氏自身の編集になる第一書房刊の全集登載作品が七四編であるから、これは概数を述べたものであるとしても、調査未了による宇野氏の誤りであり、昭和三七年（一九六二）九月人文書院刊の全集では、創作は一二七編となっている。さらに、この全集が刊行されるまで小田原市の牧野家に保存されていたという草稿の「酒友大風譚」と「無題」のうち、「無題」のほうは、人文書院刊全集の編集に尽力した保昌正夫氏も断わっているごとく異存なく「淡雪」の第一稿と推量されるから、重複を避けて計算に入れないとして、「酒友大風譚」まで数えれば一二八編となる。また、大正八年（一九一九）一二月から昭和一年（一九三六）三月までの、牧野の作家生活を正味約

一七年とすれば、年間平均七・五編強の割合で『新小説』『早稻田文学』『文芸春秋』『中央公論』『新潮』『文学界』『解放』（大正八・六創刊）『経済往来』等の有力誌に作品を発表しつづけ、その間には九八編の感想隨筆の類もはさまれているのであるから、まことに宇野氏のいうように八十五六年の作家生活をつづけて、八十余篇（実は一二八篇）の作品をのこすといふのは、まづ、めづらしい事であるVのかもしれない。

なお、もう一つ、ついでにつけ加えれば△処女作（「爪」）Vとしてわざわざパーレンでかこつてゐるのは、牧野自身の隨想「文学的自叙伝」（昭和一〇・七、『新潮』）に△そんな間（大正五年ごろの間）に、それでもぼつぼつと書いてゐた短篇をゲーテ研究の柏村に読ませて添削して貰つてゐたがVとあり、また、「貧しき文学的経験」（大正一四・六、『文章俱樂部』）では、△「十三人」の第二号に「爪」といふ旧作を出した。それは一二年前に書いた短篇なのだが、処女作といふわけでもない。『十三人』の一周年号に出した「闘戰勝仏」といふ西遊記から材を取つたものが処女作だらうVと述べているところから、普通、△島崎藤村氏より激賞の手紙を貰ひ、驚く。手紙の中に金十円の為替が封入されてあつた。右の金子は、小額ながら雑誌のために使つていただきたいといふ藤村流の慇懃な文句が書かれてゐたV（中戸川吉二年譜）という「爪」をもつて世間が処女作と認めようとしてゐることに、多少疑義を感じた故であらうか。後の昭和一〇年四月号『文芸放談』掲載の隨想「喧嘩咄」には、△ちかごろ或る日、十何年も他所にあづけ放してあるトランクをあけて見ると昔のエハガキブツクや本や手帳にまじつて、二十歳前後の写真を二束見つけた。その中に「To Mr. S. Makino—From Saburo Okada」と誌された手札型の岡田三郎の半身像と『屋上』出版記念会とある故片上伸先生をとりまいた一団の学生の写真があつた。学生は十四人ならんでゐるが、（かういふ写真には裏に名前を書いておくべきだと思つたことには——）そのうちに、浜田広介、須崎国武、下村千秋、水谷勝、岡田三郎、神崎勝とまでは指摘出来たが、その他の七人は、顔には覚えがあるのだがどうしても名前が浮ばなかつた。『屋上』といふのは、原稿紙を綴じて一冊とする廻覧雑誌の名で、僕は何とかといふ全くはじめて書いた小品を岡田三郎の手から

綴じて貰ひ、それぎりだったので準会員といふやうな感じで何時その雑誌が止めになったのかも知らなかったが、三郎との交際はそこからはずつた▽（傍点筆者）とあるから、引用文中傍点を付した△二十歳前後▽は、大正四、五年ころに相当するので、あるいは、牧野のいうように「爪」が、発表の大正八年一月より、たしかに△一二年前に▽書かれたものとすれば、それは大正六、七年になるから、もしかすると、右の引用に見える『屋上』という回覧雑誌に提出した作品が、自身で「爪」より以前に書いたといっている△西遊記から材を取つた▽「闘戦勝仏」かもわからないし、また、事実自身でいつているように、それが△処女作▽かもしれない。しかし、もとより私は『屋上』という回覧雑誌を見たことがないので、これは推量の域をでない。人文書院刊全集の年譜製作者保昌正夫氏は△「闘戦勝仏」はその終わりに「七年八月作」とあり「処女作」という▽（傍点筆者）という慎重な表現を用いている。

いずれにしろ、「爪」が発表されたのは大正八年一月月号の同人雑誌『十三人』であり、「闘戦勝仏」が発表されたのは、「爪」発表より遅れること一〇か月、大正九年一〇月号の『十三人』であるから、たといその作の終わりに「（大正）七年八月作」と製作年次が書きこんであるにしても、他の作品の製作年次が調査困難であるとすれば、全般的な順位の決定は発表年次に準拠せざるを得ず、処女作はやはり「爪」と考えてさしつかえないのではなからうか。宇野氏は「爪」発表後における文壇の消息を、その『独断的作家論』（昭和三三・一、文芸春秋新社刊）の「牧野信一の一生」の項で、やや詳しく次のようにつたえている。

『十三人』に出た「爪」が島崎藤村に激賞されても（それより三年ほど前に芥川龍之介の「鼻」がやはり手紙で夏目漱石に激賞されたときとは大へんな違ひで『十三人』と『新思潮』のちがひもあつたが）それは謂はば内輪だけの喜びのやうなものであつたから、牧野には殆んど何の足しにもならなかつた。

しかし、牧野は、『少年』に勤めながら、その翌年も、せつせと書きつづけ、三月号の『十三人』に発表した「ランプの明滅」が当時の新進評論家の宮島新三郎に認められ、七月号の『早稲田文学』（これは宇野氏の思いちがひであり大正九・七、『十三人』に「若い作家と蠅」を、更に藤村の紹介で、『新小説』に「凸面鏡」（この小説で初めて原稿料を取つた。この作品には後年の牧



野の小説の特徴となつた諸點と一種の清新な味が出てゐた、を、その他、「十三人」にも二三の小説を發表した。が、妙な事もあるもので、その翌年、佐佐木茂索に中戸川吉二を紹介された事が本になつて、牧野は「文壇といふところ」へ出たのであつた。しかし、この年（大正一〇年）Ⅱ中略Ⅱ八月号の「人間」の新進作家号に中戸川の推薦で「坂道の孤独参味」を出した。（この「人間」の新進作家号には牧野のほか、十一谷義三郎、三宅幾三郎、佐佐木茂索、関口次郎、片岡鉄兵らの小説が出てゐる。猶この時の片岡の小説は私が推薦した、元の題は「蛇の舌」であるが、原稿を見た里見が「舌」と改題した。）さて、これで牧野は「目下文壇にて最も囑望されつつある新進作家」の一人になつた、が、それよりも、この年の五月ごろであつたか、中戸川が、『東京日日新聞』に出した「牧野信一君の作品」といふ評論が牧野が文壇に出るのに一ばん役に立つた。

ここに宇野氏が書いている中戸川吉二氏推薦の事情は、氏自身が『新潮』大正一三年九月号に書いた「（人間隨筆その十）最近の牧野信一氏」の項に詳しいが、右の引用文中『新思潮』とあるのを補足すれば、これはもちろん、芥川・草田杜太郎（菊池寛）・成瀬正一・松岡譲・久米正雄らにより、大正五年二月一日付で創刊された第四次『新思潮』を指しているのであるが、この雑誌は、これより早く、明治四〇年一〇月、第一次が小山内薫らによつて發刊され、明治四一年三月に廢刊されたが、以後第二次・第三次へと受けつがれ、その間、谷崎潤一郎・豊島与志雄・久米正雄らの新作家を文壇に送り、第四次『新思潮』は、大正六年三月計一冊をもつて廢刊した。最後を「漱石先生追慕号」にしている。芥川はその創刊号に「鼻」を發表し、漱石の賞賛を得たのである。この雑誌には芥川の外に菊池寛の「父帰る」、久米正雄の「阿武隈心中」なども掲載され、文壇的に第四次『新思潮』がもつともはなばなしかつたが、同人中、芥川・久米・松岡らが、漱石の門に出入りしていたことが、彼らを早く世に認めさせる結果になつたといわれている（広田栄太郎『新思潮』第四次、昭和三二・二、『文学』）。また、宇野氏の文中「牧野は、『少年』に勤めながら、――Ⅴとあるのは、当時、大正八年二四歳（數え年）の牧野のこと、その年の七月に彼は早稲田大学文学部文学科英文学科第二部を卒業し、神奈川県立第二中学校（現小田原高等学校）当時より早稲田大学時代を経て終生の友となつた現小田原市長鈴木十郎氏の義兄巖谷冬生氏と、その夫人たま子氏に文才を認められて推薦され、それから約一年